

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ファシズムと自由主義  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 加田, 哲二  |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1936  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.8 (1936. 8) ,p.1093(1)- 1128(36)   |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19360801-0001  |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360801-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360801-0001</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮内省御用達

# 株式會社 東洋軒

電話・銀座  
代表  
五五五五  
七七七七  
五五五五  
四三二一

## 東洋軒支店

□ 列車食堂 東京事務所  
新橋驛 階上食堂

電話・銀座 (57) 〇七〇

□ 三信ビルヂング内  
八階大食堂・地階食堂

電話・銀座 (57) 五七五〇

□ 新橋 演舞場 内

電話・銀座 (75) 二七二八

□ 赤坂 三會堂 内

電話・赤坂 (48) 一七

□ 錦 水

電話・赤坂 (48) 〇〇九二

□ 日比谷公園公會堂 内

電話・銀座 (六四) 八

## 三田學會雜誌

第三十卷

第八號

### フアッシュイズムと自由主義

加田 哲 二

自由主義ほど、現代において批判の對象とせらるゝものは少ないであらう。自由主義は既に第十八世紀に一の支配的思想たるの地位に到達し、第十九世紀には、文明諸國において實際生活の上に、その思想が實現せらるゝに至り、遠く現代にまでその影響が及んでゐる。しかし、自由主義は、その最盛時たる第十九世紀において、既に批判の對象ともなり、その結果として、自由主義自體の發展をも見たのであつた。自由主義は、資本主義のイデオロギイとして成立し、且つ典型的資本主義國としての英國の政治が、資本主義への道として、自由主義を採用してゐる。

フアッシュイズムと自由主義

一 (一〇九三)

ので、資本主義に對する批判は、同時に自由主義に對する批判として現はるゝに至つてゐる。資本主義イデオロギイとしての自由主義は、經濟的自由主義であり、自由主義の經濟學であることは、勿論であるが、産業革命の社會經濟的影響が最も顯著であつたので、この經濟學に對する批判が、自由主義に對する批判の典型的なものとされてゐる。

この種の自由主義批判は、二つある。それは、ともに資本主義を否定することにおいては、同質的であるが、資本主義否定の後に來るべき社會形態の問題において、兩者は、その立場を異にしてゐる。その第一はロマンチズムであり、その第二は社會主義である。ロマンチズムは、近代的社會形態としての資本主義を批判し、これを否定する。それは、地主層または小市民層をその社會的基礎として有するが故に、身分的秩序の嚴然たる中世封建的社會をもつて、最良の社會と觀念し、それへの復歸を、社會觀の中樞的要素とする。これに反して、社會主義は、一般に第十八世紀に行はれた進歩的思想並に人間完成の思想の繼承または發展であるから、それは最早歴史の過去への復歸を信じない許りでなく、中世封建的思想に對する第十八世紀の進歩的思想の鬭争を、ロマンチズムのやうに、嫌惡しないのみならず、これを發展せしめ、而して、資本主義に表現せられた巨大な生産力を組織的に發展せしめることによつて、資本主義の惡果を一般的幸福のために轉換せしめやうとするものである。かくの如くロマンチズムと社會主義とは異なる角度から、資本主義、従つてまた自由主義を批判した初期の思想運動であるといふことが出來やう。

自由主義の資本主義的利用は、自由貿易主義となつて現はれてゐる。自由貿易主義は、國內における自由主義の國際的適用に過ぎないものであるが、一國內において、自由主義の適用せらるゝ場合と、國際間において主張せらるゝ場合とは、多少の差異がある。國際間においては、社會的發展程度の異つた幾つかの國が併存することである。

一國は、經濟生活において、既に工業資本主義の段階に到達してゐる國もあれば、いまなほ農業生産——しかも幼稚なる農業に經濟生活の基礎を置いてゐる國もある。かくる發展段階の相異は、必然的に、自由貿易主義に對する利害から、それに對する批判を惹起する。殊に、發展段階が相近寄つてゐるが、一國が他國に追いつかふとするが如き場合、具體的な例をもつていへば、ドイツとイギリスの如き場合には、イギリスの自由貿易主義に對して、ドイツの批判があり、その保護貿易の主張となることは、兩國の利害から明かである。

更に他の一つの自由主義に對する批判がある。それは、資本主義是認の立場に立つ社會政策論者の批判である。社會政策論者は、資本主義を全部的に否定しない。彼等は、資本主義における階級的對立の弊害・不利益を認識し、これを國家全體または社會全體の立場から、是正しやうとするものである。無制限な自由競争に對して、一定の是正策を主張し、資本主義社會における階級對立の様相を緩和せんとするものである。

自由主義者は、個人の利益を知るものは個人であるが故に、個人をして自由に活動せしめるとき、それが社會の最大量の幸福を齎らすと主張する。かくの如き意味において、資本主義の利害を知るものは、資本主義を自己體である。資本主義は、その一定の發展段階においてのみ、自由主義を主張する。自由主義をもつて、資本主義のイデオ

オロギーとするのは、當然であるが、資本主義が自由主義以外のイデオロギーを持つてゐないといふのは、誤謬である。資本主義の一定段階においては、自由主義はある程度まで揚棄せられる。資本主義の帝國主義的段階または獨占資本主義の段階が、これだ。この段階にいたると、資本集中の一現象として、カルテル、トラスト運動が起り、無制限自由競争は揚棄せられる。しかし、自由競争が、全體として揚棄せられるのではなく、資本の集中を促進するためには、中小資本家との自由競争を遂行し、その勝利によつて獲得せられた資本の集積を擁護するために、自由競争を制限するカルテル、トラスト運動を起すのである。この段階においては、自由主義は、資本主義自體によつて、批判の對象となる。

以上が自由主義に對する世界大戰以前までの批判の様式である。

## 二

世界大戰は、その經濟並に政治機構の攪亂の一結果として、二三の國において、革命を惹起した。この革命は、多くの場合社會主義的様相を呈した。ロシア、ドイツ並に中歐諸國において起つたものである。一方においては、かくの如き運動の影響を受けて、經濟的自由主義は、没落に瀕するが如き状態であつた。戦時における國家計畫經濟的動員も、昔日の自由主義的經濟機構を制限せしめる一の有力なる原因をなしたのであり、また戦時中における労働者階級の軍需品工業に對する貢獻は、この大戰を通じて、所謂機械化戦争が行はれたため、工場労働者の勢力を重加せしめた。ために、労働者階級の主張たる社會主義的經濟政策または政治的要求を重要視せざるを得ざるに

至つた。しかるに、労働者階級の主張する政治的要求は、政治様式、殊に政治的權利の民主主義化であり、それが前代の民主主義と異なるところは、所謂社會民主主義をもつて呼ばれる主張である。

社會民主主義的要求は、第十九世紀の後半以來、労働者階級の多數によつて支持せられたところのものであり、ロシアに行はれたプロレタリアートの獨裁を避けるがためには、最小限度において、労働者階級の主張する社會民主主義的要求を許容することが、ヨーロッパ諸國においては必要であつた。戦勝國においても、戦敗國においても、かくの如き労働者階級的要求の一部分は認容せられた。而して、それは政治的自由の方面においてある。選挙權の擴大、結社の自由、労働組合の政治的認容などが、その重なるものであつた。西歐諸國においては、澎湃として起る労働者階級的要求、それは、ともすれば、ロシア流のプロレタリアートの獨裁にまで進展しやうとする運動を、この政治的自由の認容によつて、抑制し來つたのである。

歐洲大戰後、一九二二・三年頃まで續いたのが、かくの如き労働者の運動であつた。しかるに、戦争中多大の生産的消費のために、その國富を濫費し、非常の財政的苦境に立つに至つて、西歐の資本主義諸國は、徒らに労働者階級的要求のみ、聽従してゐられない状態に立ち到つた。而して、この労働者階級的要求に對して、反感をさへ、持ち始めた社會層の存在を知つた。それは中間階級である。中間階級は、ブルジョアジーとプロレタリアートの中間に位するので、中間階級と呼ばれる社會層であつて、舊小市民としての獨立中小商工業者・中小農業者・新中間階級としてのサラリーマン層を意味する。これらの層は、プロレタリアートのやうに、自らを階級と

して組織し、その階級的利益を、防衛するだけに、組織的でない。しかしながら、中間階級は、一國における文化層として觀念せられ、自らも、一國文明の保持者をもつて任じてゐる。しかるに、この中間階級、殊に、文化層としてのサラリーマン層は、資本主義の發展的段階においては、なほ向上發展の余地を持つてゐた。その將來を、彼等の多くは、多かれ少かれ、約束されてゐた。しかるに、資本主義の獨占的段階においては、その將來に對する光明性は、薄れ行く夕暮のやうな心細いものになつた。舊中間階級が、資本主義の怒濤の中で、その生存のために苦闘してゐるのは、歐洲大戰以前から、中間階級のための社會政策が主張せられ、その一部が實行せられてゐたことによつて明かである。

これらの新舊中間階級は、歐洲大戰後特にその没落の歩調を早めつゝあつた。しかるに、労働者階級は、その組織の力によつて、その主張の一部分を實現して行くのである。この状態は、これらの中間階級の不滿を助長するものであつた。中間階級の勢力を組織せよといふ要求は、大戰後の復員の時期に起つて來た。そして、この要求は、プロレタリアート階級の要求を阻止せんとするブルジョアジーの感情並に要求と一致するところがあつた。大戰後諸國に起つたファッシスト的運動は、この傾向の一つの組織化である。

三

ファッシスト運動は、先づ中間階級運動として成立し來つた。マルクス主義者は、ファッシスト運動の本質を規定して、次の如くいつてゐる。「ファッシズムの本質は屢々誤つて定義せられた。その理由の一部分は、イタリーに於

てファッシズムが発生した政治條件が非常に複雑してゐた爲であり、一部分は多くの觀察者の見解が混亂してゐたが爲である。ファッシズムは、或は地主共によりて率ゐられたテロリスト的運動であると謂はれ、或は單に興奮し易い青年士官達の向う見ずな振舞ひだと謂はれ、或は戦争によりて、零落したる小ブルジョアの分子の絶望的發作である等と謂はれた。どの觀察者も、たゞ運動の一面ばかりを見て、而も之を最も重要なものと考へた。だがファッシズムにとつて、何が本質的決定的であるかといふことは、觀察者の眼は、最初に映じたるものによりて、とりも直さず、金權政治反對の小ブルジョアのデマゴギーによつて決定せらるるものでもなければ、又地主黨員擁護の行動によりて決定せらるるものでも決してない。今日に於ては、ムッソリーニの獨裁が小ブルジョアの獨裁及び地主黨員の獨裁ではなくして、大産業資本及び金融資本の獨裁であることは如何なる觀察者の眼にも明かである。その充分に明白な證據の一つは、ファッシスト政府の全經濟政策である。」(パシユカニース、ファッシスト獨裁の特質論、吉野・萬里共譯「一二頁」)この本質規定は、全然誤謬ではないが、ファッシスト運動の發展における重要な特質を見逃してゐる。それだから、引用文の中にも、「今日に於ては」云々と條件附で、ファッシスト運動が「大産業資本及び金融資本の獨裁」であることを指摘してゐる。もし、始めから、ファッシスト運動が、上記の經濟的要素の獨裁ならば、「今日に於ては」の形容句は、必要としないであらう。いかにも、ファッシスト運動の成熟期においては、パシユカニースが規定したところは、誤謬ではない。しかし、それに發展するまでのファッシスト運動の性質を説明するものではない。この點に關する詳説はいま本論文の主題ではないから省略するが、ファッシスト運動を中間

階級と切り離すことは出来ない。ファッシストが社会政策的または社会主義的主張を有し、資本主義に對する批判を持つてゐるのは、この中間階級運動たる重要な一面を持つためである。ファッシスト運動は、その成熟期にいたつて、始めて、中間階級大衆を、その運動の基礎として利用し、中間階級の要求を漸次大産業また金融資本の利益のための運動に轉化する。言葉を換へていへば、大産業資本または金融資本は、その恐慌に際しての苦境と、左翼的大衆運動に對する防衛のために、中間階級的大衆運動としてのファッシスト運動を利用するに至る。このファッシスト運動發展の段階にいたると、中間階級の社会主義または社会政策の主張は、捨てられて、独占資本主義の利益のための政策が、全體主義の名によつて採用せらるゝに至る。この段階においてファッシズムは成熟期に達したものと云ふことを得やう。ハロルド・ラスキは、この段階のファッシズムについて次のやうにいつてゐる。

「ファッシズムは、その本質において、経済力の機構を所有する人々の利益のための自由思想及び制度の破壊である。その勃興の原因は疑ひもなく複雑である。しかしながら、その行動の目的は、明白である。ファッシズムが權力を獲た何處においても、その爲したことは、労働階級の特質的防衛——その政黨・労働組合・消費組合を破壊することであつた。これとともに行はれたことは、ファッシスト黨以外のすべての政黨の抑壓であり、自由論議並に罷業權の剝奪である。ファッシズムは、その政權把握以前において、しばしば、社会主義的色彩のある目的を宣言した。しかしながら、第一に彼等は、軍隊並に大企業と共同して、政權を獲得したのであり、その政權把握以後においては、生産手段の所有權を本質的に變化させなかつたことは注意を要する。要するにファッシズムは、没

落期における資本主義の一制度として出現したのである。」(Harold Laski, The Rise of European Liberalism 1936, p. 247-248)

かかるファッシズム運動の變質は、當然、自由主義の問題と關連する。ファッシストの初期的主張は、前述のやうに社会主義的であり、民主主義的であつた。しかるに、ファッシスト運動と大資本家的勢力との抱合は、かかる色彩を洗ひ落して、全く後者の必要に應ずる思想と政策とに轉換した。ヨーロッパ戰後の資本主義的復活の困難、世界恐慌の打撃を切り抜けやうとする資本主義的苦悶は、ファッシスト陣營との合作による政策を採用するに至つた。それは獨裁政治による國內統制と、國外侵略である。この段階に至ると、ファッシストの資本主義に對する批判は、退潮して、政治機構の能率の問題が提出され、その最良手段としての獨裁が問題となるに至つた。獨裁の障害をなすものは、自由の諸制度である。ファッシストによる自由主義の攻撃はこゝにおいて起つてゐる。

四

従來、経済的自由主義に對する批判は、ファッシスト的批判の場合においては、自由主義一般に及び、而して、自由主義が民主主義・社会主義とともに、その基礎を個人主義に置くことを指摘し、これらの諸思想が、こゝに同根的主張である點を強調してゐる。而して、ムッソリーニの如きは、自由主義の歴史的意義について次のやうにいつてゐる。

「自由主義的理論に對して、ファッシズムは、政治の分野に於て、又經濟の分野に於て、絶對反對の態度をとる。前世紀に於ける自由主義の重要さ——單に現在の論争の範圍だけで——を誇張する必要はない。又その世紀に現

れた多くの説の一つであつたところのものを、現在及び未來のすべてを通じて、人類の宗教となす必要はない。自由主義は五十年間だけしか榮えなかつた。それは一八三〇年にヨーロッパを八九年以前に後退せしめようとした神聖同盟への反動として生れたのであつて、ビオ九世さへも自由主義であつた一八四八年にその燦爛たる年を持つてゐたのである。直ぐその後に没落が始まつた。若し四八年が光と詩の年であつたならば、四九年は暗黒と悲劇の年であつた。……

自由主義的世紀は、無限のゴルデウス結節を積重ねた後、世界戦争の犠牲を以て之を解かうとしてゐる。未だ嘗て如何なる宗教もこれ程巨大な犠牲を課した事はない。自由主義の神は血に渴いてゐたのであるか。今や自由主義は、その荒蕪たる殿堂の扉を閉さうとしてゐる。何となれば、諸國民は彼の經濟上における不可知論、政治及び道德における無關心が、嘗てもあつた如く、確に國家を破滅させるであらう事を知つてゐるからである。現代の世界のすべての政治的經驗が反自由主義であることは、之に依つて説明せられ、さうして、その故に恰も歴史が自由主義に又その教授の爲に保留された禁獵區であつたかの様に、恰も自由主義が決定的な言葉であつて、文化の超えるべからざるものであるかのやうに、歴史の外に之を分類しようとするのが、非常に笑ふべき事である事は之によつて説明される。」(ムツソリーニ全集第九卷、フアツシズモ原理、七三―七四頁)

なほ、ムツソリーニは「十九世紀が社會主義、自由主義、民主主義の世紀であつたと認められるが故に、二十世紀も亦社會主義、自由主義、民主主義の世紀でなければならぬ」と言はれない。政治學説は過去つて行くが、國民

は止まつてゐる。此の世紀は、權威の世紀、右翼の世紀、フアツシスタの世紀であると思へる事が出来る。若し十九世紀が個人の世紀(自由主義は個人主義を意味する)であつたとするならば、今世紀は「集團主義的」世紀であり、従つて、國家の世紀であると考へ得られる」といつて、自由主義の歴史の意味を強調してゐる。(前掲書七五頁)

フアツシストにとつては、自由主義は、たしかに過去の意味をしか持つてゐない。自由主義が、フアツシスト的意義において、將來の指導的理念たり得ないし、また現在の指導的理念でもないとするれば、フアツシストは何故に、自由主義を攻撃するかの問題が起つて来る。フアツシズムは、自由主義をもつて、個人主義に基礎を置く諸思想、即ち民主主義・社會主義と同視する。ロッコはいふ。

「自由主義、民主主義及び社會主義は、外見からいつても、實質上から見ても、政治學上同一の理論から出て来たものである許りでなく、一つのものから、他のものを論理的に抽出したものであつて、論理的に進んだ自由主義は、民主主義となり、民主主義の論理的發展は社會主義になり終る。長い年月の間、ある正當な理由があるとの主張のもとに、社會主義は自由主義の反對に立つものであると考へられて来た。然し乍ら、兩者相反すると云ふは、全く相對的の事であつて、よくよく二つの理論の共通の起原及び基礎に接近して見た時に、其の兩者の對立は破れてしまふ。何故となれば、兩者の相反するは、手段の點であつて、目的そのものは、決して相反する事なきを知るに至るからである。其の目的は兩者にとつて同一物なのである。即ち社會を構成する個々人の安寧・幸福がそれである。其兩者の差異は自由主義は自由といふ事によつて、最後の目的を達せんとするものであるに

反し、社會主義は生産を集合的に組織することによつて、其の目的を達せんとする所にある。故に其處には對立もなければ、國家の性質及び目的に關する見解の相違もなく、個人の社會に對する關係に就いてさへ、何等の差異をも認めないのである。唯だその目的を達し、それらの關係を確立するための手段の評価を異にする許りである。」(ロッコ著、フアッシズム政治理論、三三—三五頁)

かくの如く観ることによつて、フアッシストは、自由主義・民主主義・社會主義の個人主義に基く本質の同一性を主張する。この主張の妥當性については充分論議の余地を残してゐるが、兎に角、フアッシストの主張は、洋の東西を問はず、この主張をなしてゐる。しかれば、何故にかゝる主張をなすかといへば、フアッシストは、フアッシズム——その名稱は何であらうと——をもつて、從來の社會的並に國家的思想體系に對して、眞の對蹠的なものとするからである。ロッコはこの點について次のやうにいつてゐる。

「國家の自由主義的、民主主義的、社會主義的概念の彼之の表現に對するものではなくて、概念そのものに對する眞の對蹠は、フアッシズムの理論に、はじめて之を見出す事が出来る。何となれば、自由主義と民主主義との間に、又自由主義と社會主義との間に存在する不一致は、私の今迄述べて來たやうに、唯だ手段の差異にあるが、一方社會主義、民主主義、自由主義と他方フアッシズムとの間に横はる間隙は、全く概念の相違から生じたものである。」(ロッコ前掲書三九頁)

この概念の相異とは何か。それは社會觀の相異である。フアッシストは、人間の社會について特有な觀念を有するといふ。ロッコはこれを説明する。「人間の種族は世界に生存して居る人間の總計ではないのであるから、従つて其の總計をなす所の種々の社會團體に或る一定時に其の社會に屬する個々人の合計ではなくて、むしろ、それを組織する過去、現在及び未來の世代の無限のつながりである事は明白である。そして、人間種族の目的は、ある時に生存してゐる數人の個人の目的ではなくて、時としては、それらの個人の目的とは全然相反する事がある程である。従つて種々の社會團體の目的は、必然的にその團體に屬する個々人の目的ではなくて、時には、個人の目的と衝突する事すらあり得る。これは、種族の保存發展が、個人の犠牲を要求する場合に、多いでも明かにせられる所である。即ち戦争と云ふ場合の如きが、それである。」(前掲書 四四頁) かくの如き社會觀から、フアッシストは、所謂原子的社會觀を斥けて、有機的歴史的社會觀を採用する。即ち社會全體は「個人の目的を超越した生命と目的とが世代の不斷の繼續の歴史であり、終極であると見るのである。」(同上書 四五頁) 従つて、「國家と國民との關係は、全くフアッシズムの理論によつて轉倒せられる。「個人の爲めの社會」といふ自由主義、民主主義の理論の形式の代りに、余輩は「社會の爲めの個人」てふ形を用ゐる。」こゝに、フアッシズムの全體主義がある。

## 五

フアッシズムは、その全體主義を個人主義と對立せしめ、自由主義・民主主義・社會主義を個人主義と同根の思想であるとする。かくの如き思想性格の分類は、甚だしく奇異の感をわれわれに與へるものであるが、フアッシズムの本質を研究するとき、その當然の歸結であるやうに思はれる。フアッシスト運動は、その初期的形態においては、寧ろ

社會主義的・プロレタリア的でさへあつた。一九一九年マイランドにおける戦闘者ファシズムの結成大會においては、労働者に対する同情ある報告がなされ、ムッソリーニは進んで次のやうに演説してゐる。

「本來歴史的意義において、吾々は一九一五年以來革命の基礎に立つてゐる。われわれは労働者大衆を迎へなければならぬ。われわれはこれに適應して、労働者階級の要求を充たさねばならぬ。労働者は八時間労働を欲するか、明かに坑山並に夜業労働者が六時間労働を要求するだらうか。養老保険受領者並に廢兵が産業管理を欲するか。われわれは、すべてこれらの要求を支持する。就中労働者は、その經營を行ふやうに慣れんとしてゐるからである。經濟的民主主義はわれわれの合言葉である。封建的機關たる元老院は廢止せられねばならぬ。われわれは、王制か共和制かを決定すべき國民議會を要求する。われわれは今日既にいふ。われわれは共和制賛成であると。われわれは獨裁の如何なる形態に對しても絶対に反對である。」(Angelica Balabanoff, Wesen und Werden des italienischen Faschismus. 1931. Ss. 27-28)

また、ムッソリーニは一九一九年十一月の選挙に際して、次のやうに演説してゐる。

「われわれはプロレタリアート反對ではない。また社會主義反對でもない。何となれば、われわれは、社會主義の存在が既にそれが必然的であるといふことを示すと考へるからである。われわれはプロレタリアートに反對ではない。余はプロレタリアートに對して、完全な自由を要求する。余及びファシズムの所屬者が如何にブルジョアジイを支持せざるかは次のことによつて、これを知ることが出来る。即ちわれわれの綱領の主義要求が、私有

財産の制限、戰時利益の沒收、資本に對する重い課税にあることである。……而して、われわれはすべての獨裁に反對する。」(Balabanoff, Faschismus. S. 34)

かくの如き社會主義賛成、獨裁反對のムッソリーニの立場は、よくその操守を全くすることが出来たか。勿論、これは不可能であつた。その一つは、ムッソリーニの思想傾向にあつたらう。イタリア社會主義は勿論社會主義一般の傾向である合理主義的・議會主義的傾向を持つてゐた。この傾向に對して、否定的であつたものは、フランスから輸入せられたサンヂカリズムの影響である。ムッソリーニは早く、その影響を受けた一人である。フランス・サンヂカリズムの理論家ジョルヂ・ソレルは、嘗てムッソリーニの性格を批評していつたことがある。

「ムッソリーニはさらにある社會主義者ではない。諸君は余を信ぜよ。諸君は、何時か彼が神聖な軍隊の先頭に立つて、イタリアの國旗に、その刀劍をもつて敬禮するのを見るだらう。彼は第十五世紀のイタリア人であり、武士である。」(Edgar L. R. Rosen, Der Faschismus und seine Staatsidee 1933. S. 43.) ジョルヂ・ソレルは、早くから、サンヂカリズムの影響を受けたムッソリーニにおいて、社會主義者以上のものを見たのである。彼のこの國士的性格は、ファシズム運動において見ることが出来るし、かゝる國民主義的・國家主義的思想は、彼のファシスト運動の進行過程において見ることが出来るのである。彼は一九二二年に政權を把握してゐるが、この當時の彼は既にファシスト運動初期の彼ではない。一九二七年五月二十六日の演説で、彼は獨裁者として、國家至上主義を述べてゐる。「すべてのものを國家のために、何ものも國家に反對することなく、何ものも國家以外に出づることなく

せしめねばならぬ。」(Balabanoff, Fascismus, S. 69)この立場は自由の否定である。彼は、この立場から民主主義を否定する。

「フアンシズモは、民主主義的イデオロギーの全體を攻撃し、之をその理論的前提に於て、或はその實際的適用又は構成において排撃する。フアンシズモは數が單に數であると云ふ事實の故を以て人類社會を指導し得るといふことを否定する。此の數が週期的協議を通じて、支配し得ることを否定する。人間の本來の、有利な、豊富な不平等を承認する。人間は普通選挙の如き外部的機械的事實によつて平等化され得ないものである。民主主義的政治は眞の實際の主権が無責任であり、秘密である他の力の中に存してゐるにも拘らず、民衆に主権者であるといふ幻影を描かせるやうな政治だと定義され得る。民主主義は王のない政治である。だが時に専制君主であるにせよ、唯一個の王よりも更に絶對的で更に専制的で、更に破壊的な多數の王を持つ政治である。此の事は何故にフアンシズモが一九二二年に——偶然の理由によつて——初めて、共和主義的傾向の態度を採つてゐたにも拘らず、ロマ進軍以前にこれを放棄したかを説明する。それは一個の國家の政治的形態の問題は今日重要でないと確信し、さうして過去及び現在の王政、過去及び現在の共和政の實例を研究した結果、王政と共和政は永遠の相の下に判断されるべきものでなくして、ある一國の政治的進化、歴史、傳統、心理の表現されてゐる形式を代表するものだといふ事を確信するに至つたからである。今やフアンシズモは王政、共和政といふ對比を克服した。しかも民主主義は前者にすべての不完全さを負はせ、後者を完全なる政治と辯護して、尙此の對比の上に躊躇してゐるのである。

る。今日では、内的に反動的な或は絶對的な共和國が見られ、さうして最も大膽な政治的及び社會的經驗を集めるところの王政が見られるのである。」(フアンシズモ原理 七一—七二頁)

かくの如くフアンソリーニは、その初期の社會主義的・民主主義的傾向から、政權把握當時の獨裁主義・社會主義否定へ到達した。

## 六

ナチスについても、このことはいひ得る。ナチスの一九二〇年二月二十五日に採用せられた二十五ヶ條の綱領は、ナチスの不變の綱領とせらるゝものであるが、その重要な點において改正せられ、また事實上變改が加へられてゐる。同綱領第十七條にいふ。

「われわれは、國民の必要に適合した土地改良、公益的目的のためにする土地の無賠沒收に對する法律の制定を要求する。地代の廢止、すべての土地投機の抑壓。」

この條項を讀む者は何人も、ナチスが、土地改良の主張において、公益のためには、土地私有財産を無償沒收し得るが如く解釋するのは當然であらう。しかるに、かくの如き解釋は誤謬であるとナチスはいふのである。ヒットラーは一九二八年四月十三日左の如き釋明書を發表して、それが文字通り解釋せらるべからざることを主張した。

「國民社會主義ドイツ労働者黨綱領の第十七條に對するわが反對者側の誤れる解釋に對して、次の如く決定することは必要である。國民社會主義ドイツ労働者黨は、私有財産容認の基礎に立つをもつて、「無賠沒收」の條項は、

立法的可能の制定に關するのみである。それは、不正なる方法をもつて獲得せられ、國民安寧の見地から管理せられざる土地は、必要に應じて、沒收せらるべしといふにある。従つて、この趣旨は、第一に、ユダヤ土地投機會社に向けられるものである。」(Gottfried Feder, Das Programm der N. S. D. A. P. S. 21)

綱領第十七條が一九二〇年に起草せられ、これに對する釋明が、一九二八年にヒットラーによつてなされた理由は、當時ナチスと農村地主との關係が成立せんとしてゐたときであり、この土地私有財産の條項は、この關係の促進にとつて確かに不利のものであつたので、ナチスは、一舉にして、もともと不明瞭なこの條項に關する解釋を、ナチス的に解釋し、純然たる文字上からの解釋をもつて、誤謬であるとしたのである。このことは、ナチスが、土地所有に關して、地主階級に讓歩し、そのフュンシスト的運動の進展への便宜を計つたと見るべきである。

これよりも、重要な條項についての實際的修正改變がある。それは利子奴隸制打破の問題である。ナチス二十五條の綱領第十及び第十一條にいふ。

「第十條 精神的または肉體的生産を行ふことは、すべての國家成員の第一の義務でなければならぬ。個人の行動は、一般の利益に反するものであつてはならぬ。それは、全體の框内において、而してすべてのものの効用のためにするものでなければならぬ。

故にわれわれは要求する。

第十一條 不勞所得の廢止。利子奴隸制の打破。」(Feder, S. 20)

この條項中、利子奴隸打破に關しては、初期ナチスの唯一の經濟學者といはれる技師出身のゴットフリード・フエダの唱道するところであつて、フエダの得意の主張であり、且つナチスの獨得の主張であると、そのナチス綱領註解の中でいつてゐる。彼はいふ。

「これに反して、國民社會主義は、利子奴隸打破に關するその主要要求において、眞に建設的なものである。而して、この要求は、深刻なものがあると同時に、その結果は包括的である。余の小勞作「わが綱領の核心」(國民社會主義年報一九二七年)において、この要求が、すべての他の黨派及び結社中にあつて、特殊の地位を持つてゐることを指示した。他のわが黨綱領の要求においては、一部分は右翼政黨の、一部分は左翼政黨の要求するところと類似し、または同一なるものを持つてゐる。たゞこの主要要求においてのみ、他の如何なる政黨においても、これに對比するものを持つてゐない。……『利子奴隸』とは何か。

すべてのユダヤ的高度資本の貨幣または利子支配の下に立つ、民族の状態をいふのである。」(Feder, op. cit. Ss. 30-31)

フエダは、ナチスの經濟學者として、その考察によつて得た産業資本と貸附資本との區別から、貸附資本の活動による利子徴収から、利子奴隸制の發生すること、並に、この貸附資本はユダヤ資本であることを主張し、ユダヤ人排斥の經濟理論を構成したのである。フエダは、ナチスの初期において、既にこの理論を唱道し、ドイツ労働黨の集合において、それを講演した。ヒットラーは、この講演を聴講した。そのときのことを、ヒットラーはそ

の「余の闘争」(Mein Kampf)の中に書してある。

「余が始めて、利子奴隷制打破についてのゴットフリート・フェダアの講演を聞いたとき、(一九一九年)余は、それが理論的真理について語つてをり、ドイツ民族の將來に對して巨大なる意義を持つべきことを直ちに知つた。國民經濟と取引所資本との嚴密な區別によつて、資本一般と闘争することによつて、獨立的な民族的自立の基礎を脅かすことなく、ドイツ經濟の國際化に對して、反抗し得るのである。いまやドイツの發展によつて、最も困難な闘争は、敵對する民族に對するものではなくして、國際資本に對して、なされなければならないことは、明かである。余はフェダアの講演において、この來るべき闘争に對する巨大な言葉を感じた。國際的金融並に貸附資本に對する闘争は、ドイツの經濟的獨立並に自由のためのドイツの國民的闘争の最も重要な綱領となつたのである。」(Adolf Hitler spricht Ein Lexikon des Nationalsozialismus 1934 Ss. 109-110)

かくの如き重要性を持つた利子奴隷制打破の主張に關しては、ナチスの中からも、これを重要視しないものが出て來た。ハンス・ロイプケ(Hans Reupke, Der Nationalsozialismus und die Wirtschaft 1931)の如きは、これである。彼は、貸附資本の利子問題について、利子廢止論の歴史的批判、即ち第十九世紀後半におけるブルードンの同様の提案に對する批判(例へば、マルクスの批判)の如きから、この主張の價値は、今日既に清算せられたものであつて、決して、今更こと新しく主張せらるべきものではないとした。(同上書三〇一—三二頁)また實際政治上においても、フェダアは、一九三〇年から一九三二年に亘る財政上の浮動的國債及び歳入不足解決の法律案を提出し、

一九二五年一月一日より一九二九年十二月三十一日に至る金融取引上の利益を全部徴收すべしといふ法律案を提出したのであるが、ナチスの工業資本家及びその他の大資本家との提携の成立とともに、この法律案を引き込めてしまつた。(今中次郎 民族的社會主義論二五四—二五六頁)かくて、鳴物入りをもつて、宣傳せられた利子奴隷制の打破——他黨にはなくナチスの綱領においてのみあるこの主張は、實際においては、資本家層との利害關係上、これを撤廢してしまつたのであつて、ロイプケのいふやうに、それは、既に初期ナチスに對してのみ、意義を有するものとなつた。これは、ナチスが經濟機構に對する認識不足の一例でもあるが、ナチスの成熟期フアンシズムへの進展が、こゝに至らしめたといふべきであらう。

## 七

このことは、わが國におけるフアンシスト的運動についてもいひ得る。わが國におけるフアンシスト的運動は、一九二九年の世界恐慌を契機として起つて來たのであるが、その最初に現はれたものは、國家社會主義的傾向を持つものであつた。この傾向において、それは從來の單なる保守反動の運動と自分を區別してゐたのである。これらの論者または運動者が滿洲事變を契機として、内外における政治經濟機構の改造を目指してゐたことは明かであり、彼等の國家主義的傾向と、無産政黨からの轉向者としての社會主義的傾向が、こゝに合して、國家社會主義的傾向を持つた。しかるに、一方單なる保守反動の論者、または急進的思想の反對者は、政治經濟機構の改革を要求しはするが、國家社會主義を採用することは、わが國情に反するといふ見解を持つものもあり、また單に從來の政黨政治

の害悪を除き、わが國の海外發展のみを企圖せんとするものもある。しかし、これらの諸論者の主張は、政治または經濟の現在の機構を改革すべきことにおいては一致してゐる。かゝる改革を企圖すべきことが、わが國の精神を最もよく開顯する所以であると主張する。この内國家社會主義論者(その代表的論者として、われわれは林榮未夫・石川準一郎氏等を挙げる)の影響力は、その滿洲事變當時ほど大ではない。いまや、國家社會主義論または運動は退潮しつつある。例へその主張は、北一輝氏の「日本改造法案大綱」(大正八年)において、力強く主張されてゐるとはいへ、その實際的影響は、國家社會主義的體制を創設すべきクーデタ的方法にあつたやうに思はれる。これらの思想を根據として、行はれた最近にいたるまでの種々な事件の成行並にその影響は、均しく獨伊におけると同じやうな傾向を持つてゐる。最近筆者は次のやうに書いたことがある。

「五・一五事件から二・二六事件にいたる一聯の運動は、愛國國家主義運動であるが、その主張するところは、中間階級的全體主義に外ならぬ。それ故に、これらの諸事件の當事者は、農山漁村問題、中小商工業問題を探り上げて、その解決の手段としての政治の革新を主張し、その革新のために、政治首脳部に對する個人的攻撃を加へたに過ぎない。政治經濟機構の改變が、首脳部の同質的すげ換へによつて行はれ得ると考へてゐるところに、これらの運動者の認識の不足がある。ゆえに、これらの前衛分子の犠牲によつて、常に彼等の社會的經濟的方面の要求は、極小の限度において認められる。即ち齋藤内閣においては、時局匡救費の支出であり、岡田内閣においては、農村の自力更生であり、廣田内閣においては、僅かに退職積立金法の設定であり、次に來るものは、増

税である。しかるに、その政治運用形態における要求たる學國政治は、事件毎にその内容を強めて行くといふ行方をしてゐる。この事實は、中間階級的社會的要求が徐々に剝奪せられて、その實行に必要とせらるゝ政治運用形態のみが採用せらるゝのである。」(拙稿「日本ファシズムの生成と發展」エコノミスト 昭和十一年七月十一日號 尙ほ拙稿「最近の社會的政治的動向」財政經濟時報 昭和十一年五月號參照)

かゝる傾向は、この運動における目標が明確でなく、國家革新の問題をその基礎たる經濟機構の問題として把握しないためでもあるが、全體主義的立場の不明瞭性は、根本革新の問題を、單なる政治的手續の改變の問題と解せられる場合が多いのである。殊に、その行動が單に端緒的行動を採るのみであつて、それ以上に深く諸機構の本質的部分に觸れず、革新問題を上層部分に一任する傾向が、かゝる結果を齎らすに至るのである。それは兎に角として、この種の運動が、その理論において、その現實においても、筆者が指摘した傾向を述べることは、注目すべき點である。

## 八

諸國におけるかゝる傾向の發展は、ファシスト本來の主張たる獨裁の觀念に到達せしめてゐる。イタリー・フランストは、その選良理論から獨裁理論に至つてゐる。この場合、その理論的淵源として考へらるゝものは、フランス・サンチカリズムの理論家ジョルヂ・ソレルの理論であり、更らに遡つては、アンリ・ベルグソンの創造的進化の哲學である。(Rosen, Fascismus und seine Staatsidee) これらの理論に基いて、大衆を指揮する獨裁者の意思を

構成するに至るからである。ムッソリーニはいふ。

「ファシズムは國民を多數者の水準にまで引下げる事によつて、多數者を平均させる民主主義に反對する。けれどもファシズムは、民衆が量的に考へられず、質的に考へられたならば、民主主義の最も純粹な形式である。即ちより道徳的であり、より結合的であり、より眞實なるが故に、より有力なる觀念であり、即ち國民の中に於て少數の者、寧ろ唯一個の者の意識と意志とが遂行せられ、さうしてその理想がすべての者の意識と意志の中に遂行されるやうになるが如き觀念である。自然から又歴史から、種族的に、一つの國民を形成する理由を引出す者すべてこの意志である。それは唯一の意志と意識として、精神的發展と形成の同一線上に進むものである。人種でなく、地理的に區別された地方でなくして、歴史的に永續する民族、一つの觀念によつて統一された多衆である。その觀念は生存及び能力の意志であり、自己の意識人格である。」(ファシズム原理 六四頁)

ファシストは、かくの如き多衆を指揮すべき意志がムッソリーニその人であるといふ。ヒットラーの如きも、その精神において、ファシズムの場合と異なるものではない。彼は一九二三年四月二十七日の演説の一節に次のやうに云つてゐる。

「わが民族の必要とするものは、議會的指導者ではなく、神の前において、世界に對し、その良心に對して、善と認められたことを、必要に應じては、多數に反對しても、實行するやうな指導者である。わが民族の大衆の中からかゝる指導者を得ることが出来たならば、彼を圍つて、再び一の國民に凝結するであらう。」(Hitler Spricht. Ss.)

53-54)

「指導するといふのは大衆を動かすことが出来ることだ。思想を構成する能力は、指導者能力と何等關係のないことである。(Mein Kampf. Hitler Spricht. S. 54)

選良理論といひ、指導者原理といふのは、要するに、大衆を獨裁するところの原理主張である。かくの如き主張は、わが國においても發見し得る。おそらく、それは、志士の原理と名づけてもよいであらう。その論者はいふ。

「特に此際力説高調して、皆様の眞剣な肝銘をお願いしたい事は、かやうな國民社會的革新は、たゞ救國濟民の大道を天意に従つて歩み得るの志士の一團によつてのみ開拓されるものであるといふ一大事であります。此所に革新本義に對する要石が据え置かれてあるのであつて、眞の革新は、これを缺いて成立したためしは未だ歴史に少しも示されておらないのであります。かやうな大事をたゞ一死以て開拓いたすなどといふ志士は申すまでもなく、何時の場合でも數に於て多くを求め得るものではありません。然し、天意によつて只撰ばれた天意を行ひ得るの志士は各層に散在してゐることも事實であります。そしてこれをして革新の大道を歩ましむべく一團たらしむるものも、天意といふ外ありません。天意によつて撰ばれた少數の志士に、大勢なればこそ、大衆が率ひられて、革新の大動行を捲き起すものに外ならないのである。」(日本愛國革新本義)といつて、「少數志士」の活動を要求してゐるのはムッソリーニ、ヒットラーの場合と同じく、選良理論、指導者原理と同じ立場である。

これらの、選良理論、指導者原理、志士の原理は、疑ひもなく、多數をその基礎とする民主主義の原理ではなく、

反つて、獨裁的貴族主義的傾向を持つものである。故に、ロイプケの如きはナチスに關して、ナチスを別の言葉でいふならば、「貴族主義的社會主義」(Aristokratischer Sozialismus)といふべきであるとしてゐる。(前掲書 四八頁)

九

ファッシスト的運動は、その運動の最初から大衆運動として起つたのではない。その運動の初期においては、ドイツにおいても、イタリアにおいても、ある意味においては、わが國においてさへ、大衆運動は、民主主義の運動として、また社會主義の運動として、存在したのである。かくの如き大衆運動または大衆的傾向に反對して起つたのが、ファッシスト的運動である。この意味において、ファッシスト的運動は、最初から非大衆的運動として規定されてゐた。しかし、それが社會的政治的運動である以上、例へ獨裁理論を持ち、指導者理論を持つてゐるにしても、獨裁すべき大衆、指導すべき大衆を持たねばならぬ。かくて、ファッシストもまた社會革命的綱領を持つに至つた。殊に西歐においては、數十年の社會主義的訓練の結果は、單なる祖國感情、國家觀念に訴へることによつて、大衆を動かすことが出来なかつたのである。大衆の生活改善の要求は日に強くなりつゝある。かくの如き状態に應じて、ファッシストもまた社會革新的政策を持たねばならなかつた。しかるに、ファッシスト運動の進展を援助したものは、左翼的社會運動の正面の對立者としての金融並に産業資本である。これのファッシストとの抱合は、既に詳説したやうに、ファッシスト的社會革新政策の色彩を段々と洗ひ落して行つた。

その後に残るものは、社會革新的政策を振り捨てた全體主義である。それは、單に全民を全體のために奉仕せしめるものに過ぎない。具體的にいへば、それは現在の政治經濟機構の維持發展のために、全民を獨裁するに過ぎない結果となる。この場合、かゝる行動を遂行する上において、障害となるものは、人民における自由行動であり、かくの如き行動を許容しやうとする自由主義的傾向である。故にイタリアにおいても、ドイツにおいても、ファッシストが政權把握前後において、最も力を盡して、闘争したのは、コムニニストとであるが、それへの勝利の後には自由主義に對する攻撃が始まつてゐる。

ドイツについていへば、一九二九年の世界恐慌以後において、ナチスの擡頭には見るべきものがあつた。即ち一九三〇年九月の總選舉における劃期的な黨の増大である。しかし、増大したのは、ナチスのみでなく、K・P・Dの如きも、その一つであつて、それらは、中間諸黨の犠牲において、左右兩翼の發展が行はれたのである。この時分から、ナチス對コムニニストの衝突は屢々繰返された。一九三三年二月三十日におけるヒットラー組閣後においては、國會焼失問題を口實として、ナチスはK・P・Dの彈壓破壊に勉め、その一應の成功後においては、社會民主黨の彈壓解體、社會民主黨所屬の労働者諸團體の解體改組が進められ、更らに、進んでナチス一黨の全國的支配が企圖された。ナチスの友黨として、在郷軍人團體としての鐵兜團(シュタール・ヘルム)の如きも、ナチスに改組され、諸他の所謂ブルジョア政黨の如きも、盡く解體せらるゝに至つてゐる。その他政黨團體の解體は、ナチス獨裁の障害のすべてを排除せんとするものであつて、殊にナチスに對する自由論議の存在を否定するものであり、この點においては、プロレタリアートの獨裁といふ名において共產黨獨裁を實行しつゝあるサウエート同盟における

言論抑壓とその軌を一にしてゐる。かくて、獨裁と自由とは、決して、兩立し得ないことを示してゐる。この意味における自由は、政治上の自由、言論の自由、結社の自由である。これらの自由が所謂自由主義の主張において、主要なものであるのはいふまでもないことであり、自由主義的闘争における主要命題であつたことは、自由主義史の示すところである。

しからば、ファッシスト・イデオロギーは一切の自由を抑壓するかといへば、さうではない。ファッシストは、勿論自由主義者でないことは、前段の説明によつて明かである。しかし、経済上の問題については、ファッシストは可成重要な點において、自由主義と共通するものを持つてゐる。ファッシストは一七八九年のフランス革命における人権宣言第四條の「自由は、他を害せざるすべてのことを爲し得ることをいふ」といふ定義ほど、自由主義的ではない。また社會成員が、その好むところを爲すことによつて、それが「見えざる手」に導かれて、社會全體の利益を構成するといふ意味の社會觀を是認するものではない。この點は、既に述べた諸點から明瞭である。しかし、ファッシストは、經濟生活の領域において、その革新において極めて漸進的である。ヒットラーは一九三三年七月六日の演説において、次のやうにいつてゐる。

「經濟は生ける有機體である。われわれは、それを一撃にして、變更することが出来ない。經濟は、人間性に關係ある原始的原則に従つて構成されてゐる。いま經濟に進んで革新を齎らさんとする思想家は、國家と民族とを危険に陥し入れるものである。われわれは、實際の經驗を、ある一定の思想に反するからといつて、斥けてはな

らぬ。われわれが、革新をもつて、國民の前に出づるとき、われわれは、その物象をよく理解し、これを處理し得ることを證明しなければならぬ。われわれの任務とするところは、勉強であり、勉強であり、そしてまた勉強である。」(Hitler Spricht, S. 117)

かくて、ヒットラーは、その初期において、唱道した經濟革新政策を自ら放棄してゐるのである。しかし、このことは、ナチスの經濟觀、殊にその企業觀を知るものの別に不可思議としないところであらう。ナチスは、私有財産の存在を是認し、大中小經營の健全な混在を認め、而して、信託者としての企業者を認める。(Feder, op. cit. S. 35) 企業者は國家に對する義務を負はねばならぬ。それは全體の經濟の負擔者として、その指導者としての義務を有すると同時に、企業的指導の精神の發現の相當な程度までの自由を有する。(Reupke, op. cit. 9. Kapitel) イタリー・ファッシストの場合においても同じ見解が採用されてゐる。ムッソリーニは、經濟的自由主義の敗北を確認し、國家の經濟への干渉を高唱する。

「資本主義の劇的矛盾を解決し得る者は國家である。恐慌と呼ばれるものは國家により、國家に於てでなければ解消され得ない。自由主義の曉に「國家は無用となるべく、又その解任を用意すべく、努力しなければならぬ」と述べたジュール・シモンは何處にあるか。前世紀の後半に於て、國家は余りに多く支配する事を遠慮すべきだと斷言したマカロックの亡靈は何處にあるか。經濟的變化に於て國家の繼續的な注意深き、避くべからざる干渉に面して、イギリス人ペンダムは何を言ひ得るであらうか。彼に従へば、産業は國家に對して、單に平和

の中に置いて貰ひ度いと要求しなければならなかつたのである。或はドイツ人フンボルトは何を言ひ得るであらうか。彼に従へば「怠惰なる」國家こそ、最良のものと考へられねばならなかつたのである。自由主義的經濟學者の第二の彼が、第一の彼より極端でなかつたと云ふ事は事實である。さうして、既に同じミスミスは——注意深くはあつたが——經濟に於ける國家の干渉に門戸を開いた。自由主義を云ふものが個人を云ふとすれば、ファッシズモを云ふ者は國家を云ふ。けれどもファッシヨ國家は唯一であり、さうして、獨創的創造である。それは反動的ではなくして、革命的である。政治的分野においては、黨派の分派主義によつて、議會主義の權力濫用によつて、會議の無責任によつて高閣に束ねられた一般的問題の解決を、それが先見するからである。經濟的分野においては、産業におけると同様に労働部門に於ても、常に多數であり、力ある組合的機能によつて、その闘争によつて、またその協調によつて、道徳的分野においては、秩序、訓練、祖國の道徳的忠告であるところのものへの服従の必要によつて、先見するからである。ファッシズモは強力な有機的な同時に廣い民衆的基礎の上に立つた國家を欲する。ファッシヨ國家は經濟的分野さへも亦自分自身に取戻した。」(ファッシズモ原理 七八頁)

かくの如く、經濟的自由主義を排撃したムッソリーニは、經濟的自由主義の批判から、社會主義に至るのではない。彼は、また自ら資本主義に止まるともいはぬ。こゝに彼の組合主義經濟が來るのである。彼は一九三三年十一月十四日の演説にいふ。

「一九二三年一月十三日、最高評議會が創設された時、皮相的見解を抱く者は、一制度が創設されたと考へたか

も知れない。否、その日において政治的自由主義が埋葬されたのである。黨及び革命の武装的防禦隊なる民兵を以て、革命の最高機關なる最高評議會の創設を以て、自由主義の理論及び實際であつたところのものに打撃が加へられ、革命の道が決定的に開かれたのである。

今日われわれは經濟的自由主義を埋葬するのである。

組合は、最高評議會及び民兵が政治的分野に於て狩をする如く、經濟的分野に於て狩をする。

組合主義は組織された、従つて統制された經濟である。何となれば統制なき組織は考へられないからである。

組合主義は社會主義を征服し、自由主義を征服し、新しい綜合を創造する。

一の事實は徴候的である。恐らく十分に省察されない事實である。資本主義の没落が社會主義の没落と一致すると言ふ事實である。」(ファッシズモ原理 二五四頁)

この組合主義經濟においても、私有財産は認容せられ、相當の程度までの活動の自由が認められてゐるのである。昭和九年十月十日に發表された陸軍省新聞班の小冊子「國防の本義と其強化の提唱」の中に表はれた經濟觀について、關説して置くことは、決して、無駄ではない。この小冊子は、「たゞ、かいは創造の父、文化の母である」といふヘラクリスト流の闘争社會觀から出發して、「國防は國家生成發展の基本的活力の作用である。従つて國家の全活力を最大限度に發揚せしむる如く、國家及社會を組織し、運営する事が、國防國策の眼目でなければならぬ」といふ國防第一義的軍部的國家觀を強調し、この目的のために、國內の再編成を實行すべしといふのである。かゝる見

地から、この小冊子は、現在の經濟機構を次のやうに批判してゐる。

「1、現機構は個人主義を基調として發達したものであるが、其反面に於て動もすれば、經濟活動が、個人の利益と恣意とに放任せられんとする傾があり、従つて必ずしも國家國民全般の利益と一致しないことがある。

2、自由競争激化の結果、排他的思想を醸成し、階級對立觀念を醸成する虞がある。

3、富の偏在を來し、國民大衆の貧困、失業、中小産業者、農民等の凋落等を來し、國民生活の安定を庶幾し得ない憾がある。

4、現機構は、國家的統制力小なる爲め、資源開發、産業振興、貿易促進等に全能力を動員して、一元的運用を爲すに便ならず、又國家豫算の甚しき制限を受け、國防上絶對に必要とする施設すら之を實現し得ざる状態に在る。」(四一—四二頁)

これによれば、現機構は、經濟活動が個人の、恣意に放任され、競争の結果、階級對立を激化し、國民の生活を不安定ならしめる。而して、國家統制力の過小もまた問題である。これが、現資本主義に對する批判的認識であるが、これを如何に修正または革新することが要求されるか。個人主義に對して、道義的經濟觀念としての全體主義、國民生活の安定、金融諸制度の改善、公租公課の公平、國家的利害に反せざる範圍内においての個人の創意と企業慾との満足などが擧げられてゐる。而して、「現經濟機構の變改は正の方案として、第四に擧げられたのは、「國家の要求に反せざる限り、個人の創意と企業慾とを満足せしめ益々勤勞心を振興せしむること」である。この點から見れば、それは、所謂社會主義の主張ではない。恐らく國家による統制經濟の主張であらう。

而して、また五・一五事件から二・二六事件の思想的基礎を爲したやうにいはれてゐる「日本改造法案大綱」の中に主張せられた、經濟改造計畫もまた社會主義をもつて、時代遅れのものとし、ある程度までの個人財産とその

活動の自由を認めてゐることは明かである。(拙著日本國家社會主義批判 第二章参照)

## 一〇

以上論ずるところによつて、フアッシスト的思想の發展とその自由主義に對する關係を知り得た筈である。フアッシストは、その政治方面においては、一國一黨を實現し、完全なる言論統制を行ふことによつて、政治的自由を全體として否定した。自由主義は、これを歴史的に見れば、第一に、ローマ法王の宗教的絶對主義に對立して、宗教改革において、起つた思想である。この場合、ローマ法王なる神の仲介者を排除することによつて、直接神との交渉を求めたのである。ローマ・カソリックに對するプロテスタント諸派の態度は、これであつた。かゝる宗教的自由主義は、プロテスタントの勃興とともに、宗教的寛容の思想となり、更らに、政治上における王侯對市民の闘争における政治的自由の要求と合して、一般言論自由の問題にまで發展した。政治上の自由は、市民の發言權を要求として、議會開設の要求となり、この要求が最も美事な果實を結んだところは、イギリスである。この議會政治を通じて、諸他の個人的自由が順次獲得せられた。信教・言論の自由は既に擧げた。住居の自由、結社の自由等がある。これらの自由は、自由主義の内容として重要なものであり、フランスにおける一七八九年の人權宣言の内容に定められたところのものである。この權利は、その第一條「人は出生及生存に於て自由及び平等の權利を有す」といふ規定から出發した自然法的、個人主義的社會觀から出發してゐるのである。この自由主義的主張は、フアッシストによつて、盡くすべての國民から剝奪せられたのである。いまや、政治的自由は、フアッシスト國家には存

在しない。——それは、サウエート同盟においても同じである。——この點において、フアンシスト獨裁は成功であり、現代の自由主義の主要内容を現實から否定し去つたものは、フアンシストであるといふことが出來やう。

しかるに、經濟的自由主義の方面にいたると事情は少しく異なるのである。既に最初に述べたやうに、經濟的自由主義は幾多の批判に遭遇しつゝ、現在にいたつた。元來經濟的自由主義は、政治的自由主義と同じやうに、封建主義に對する鬭争として生れた市民社會の哲學である。中世的經濟機構の崩壊以後においても、絶對主義の保護助長政策と鬭争するの運命を持ち、僅かに工業革命當時において、その勝利を獲得したのである。しかるに、工業革命における種々の社會問題は、直ちに經濟的自由主義に對する批判を生んだのは、前述の如くである。

經濟的自由主義は、單に批判されたに止まらず、資本主義の發展によつて、その思想内容の變改を余儀なくされてゐる。殊に、資本主義の帝國主義的段階または獨占資本の段階においては、經濟的自由主義は、一般經濟政策の基調たることを得なかつた。經濟的自由主義は實に工業資本主義下のイデオロギーであつた。而して、帝國主義的段階に至ると、政治と經濟との關係は、工業資本主義におけるよりも、緊密を加へる。工業資本主義における政治の任務は、たゞ安價な生産を保證し、そのための經濟活動の自由を確保する程度において限定せられてゐた。しかるに、帝國主義的段階においては、經濟を指導するものは、政治であるかの如き様相を呈する。國內における獨占の組織並に海外に對する資本の投下は、政治の援助なくしては不可能である。故に、この段階においては、政治の經濟に對する重要性、従つて政治の經濟に對する干渉は、より加重せられるのを常とする。而して、現在の列強は、

この經濟の段階にある。

經濟的自由主義は、この段階においては、その存在理由が極めて少ない。しかし、資本主義の獨占的段階においても、獨占下における競争は存在する。即ち、獨占的企業と、その傍において、細々と生存し續けて行く、中小經營の企業が存在するし、また相當大なる規模における經營の存する場合もある。かゝる場合においては、獨占を一層強化せんとするために、ある程度までの競争——相手を自己の力の下に壓服するための競争が必要である。且つ獨占價格の高位なる場合には、順次に、その獨占と競争しやうとする他の企業者が現はれる。こゝにおいてこの企業者との競争の自由が確保せられねばならぬ。故に、獨占的段階の下においても、自由の要求と必要がある。

而して、この獨占的段階において、尙ほ生産過剩が、國內的並に國外的購買力の減退から發生する場合には、企業におけるある程度までの自然的調節——經濟的自由主義——に任されるのであるが、その程度が激しくなれば、國家がその救済に出動することは、高度資本主義下においては、普通のことである。

かゝる段階においても、一定度の經濟的自由主義の必要が常に感ぜられてゐる。

いま、フアンシスト的經濟觀について見れば、それは、經濟的自由主義を終焉せしめる主張はなしてゐる。しかし、經濟機構の革新は、以上述べたやうに、急進的でもなければ、大規模的でもない。ヒットラーが述べ、ムッソリーニが論ずる程度において、それは行はれてゐるに過ぎない。それは、私有財産の基礎の上に立ち、企業者活動のある程度までの自由の上に立つて、これに、國家統制を加へたものに過ぎない。國家統制は、法の力によつて、

行はれるから、その響は強いのであるが、現在においても、経済界の相互間における實力による統制は、甚だしいものがある。殊にカルテル統制の如きは、その實力による點において、國家統制に匹敵するものであらう。

ファッシストは、かくの如きカルテル、トラスト的統制を國家制度の中に採用して、國家統制と名づけたに過ぎぬ。この統制によつて、從來實質的統制外にあつた企業は、余程窮屈の感を懐いたであらうが、それは、規模においても小さな輕工業の類に過ぎないとすれば、この國家統制を受ける重工業・大工業の如きは、從來の業者間の統制を國家統制に移したまでである。而して、この國家統制において、労働者統制が、資本家に對する統制よりも、嚴格に行はれてゐることは、イタリアにおいても、ドイツにおいても、事實であつて、彼等は、罷業權を剝奪せられ、自由な労働組合も組織せられずとすれば、それが如何なるものを意味するかは自明のことであらう。かくの如くファッシストは、その聲を大にして、經濟的自由主義の害悪と、その統制化の必要をいふのであるが、それは、既に、實際に存してゐる經濟的自由主義の縮小を認め、統制を國家の負擔において爲すに過ぎないのである。經濟的自由主義に對して批判を與へたものは、資本主義それ自體の發展である。さうだとすれば、それを自己のイデオロギーとして採用してゐるファッシストの立場は、また資本主義——獨占資本主義の立場を容認するものである。かくの如くして、工業資本主義時代の自由主義を攻撃することによつて、獨占資本主義に順應しやうとするものが、ファッシストの經濟的イデオロギーである。

(一九三六・七・一三・稿了)

## 本居宣長の社會經濟思想

— 國學運動の勃興 —

野村 兼太郎

徳川時代の思想史に一つの大きな流れをなしてゐるものは復古的精神である。それはかなり早くからその端緒を發してゐる。幕府の勢力が確立され、家康の文治主義に伴ふ學問の復興は新思想の形成と云ふよりもむしろ多分に懐古的であつた。幕府自體の歴史編纂の事業を始めとして、歴史の學問的研究が一般に勃興した。支那思想の影響を受け、「直書事實勸懲自見」の立場にあつたとは云へ、徳川初期に歴史學はある程度の發展を見せてゐた。林羅山に依つて著手され、春齋に至つて完成された「本朝通鑑」、水戸家の「大日本史」等の大著作を始めとし、山鹿素行の「中朝事實」や新井白石の「古史通」「讀史餘論」等の著作が享保期までに著され、歴史學の一通りの完成はなされたものと見てもよい。殊に白石の史觀が批判的、學問的であり、ある意味に於いて近世史學の先驅をなすものであつた。この歴史研究の結果は何を意味するものであつたらうか。それは一方に於いてわが國の特異性——従つて又その